

一 長唄 春の踊り

ふれあい体験こども教室
(美登利会)

二 長唄 羽根の禿

柳香会
熊坂 百唯
(六歳)

江戸時代の遊郭で花魁や太夫に仕えた見習いの少女「禿（かむろ）」を題材にした演目です。鮮やかな衣装に大きな羽子板を持ち、愛らしく軽快に羽根付きや鞠つきをして正月休みのひと時を楽しむ様子を描いています。天真爛漫な仕草を見せる一方、江戸情緒、遊郭の賑わいも感じられます。艶やかさと可憐さ併せ持つこの作品は、日本舞踊の華やかさと温かみも伝えてくれます。

三 長唄 外記猿

香扇会
花柳 秀美冷

この曲は猿回しを主題に表現したもので小猿を連れて旅して回る猿使いは、行く先々のお屋敷の門を叩き、猿回しを披露します。また、猿は山王の使いとも言われ、猿があれば馬が病氣にかからないとの言い伝えがあり、馬を大切にする武家屋敷では、馬の健康を願って猿を舞わせたといわれています。

四 常磐津 山姥（山めぐり）

くれない会
花柳 寿名君

嘉永元年十一月、江戸河原崎座で初演されたもので遊女上りの八重桐が後に山姥となり、坂田金時の母となるという、数ある山姥系統の集大成曲です。踊りでは、その中から山姥が怪童丸（後の坂田金時）と別れる場面で踊る山めぐりの所を独立させて、山姥の一人踊りとすることが多く、今日では舞踊会の人気曲となっております。

五 常磐津 菊の盃

仙の会
坂東 仙竜

前半は、重陽の節句にちなみ、秋の御所での曲水の宴や菊花の美を優雅に描きます。後半では酒を好む架空の動物・狸々の舞に転じ、祝賀の趣を深めます。昭和二十九年、常磐津菊三郎の四十周年記念に発表された祝儀曲で、素踊りで演じられることが多く、長寿や繁栄を祝う華やかさと品格をあわせ持つ作品です。

六 常磐津 神楽娘

柳香会
若柳 吉あす香

江戸の町の祭りに浮き立つ娘が、神社で売られているお面ををかけ変えながら、姫、大蛇、素戔鳴尊、ひょっとこ、オカメとなり大素戔鳴尊と大蛇伝説を語り踊ります。祭りの高揚感と日本舞踊の優雅さが融合し、神話や民話の世界を生き生きと表現する華やかな演目です。

七 清元 旅奴

茂美会
若柳 茂駒

大正十五年に二代目花柳寿輔（のちの寿應）が新しく振付して花柳舞踊研究会で踊ったのがきっかけとなり、その後各流派でもとりあげるようになったと言われていますが、旅を行く一人の奴の気ままな道中がおもしろおかしく描かれております。一杯機嫌の奴が状箱を刀に結んで肩にかつぎ、走り出てきての明るく酒脱な、そしていかにもリズムカルな踊りは他の奴ものとはまた違った風趣もあります。これらのシャレっ気のある振りがこの小品の見どころにもなります。

